

令和7年度小松市立丸内中学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況(中間・8月提出)	取組の成果と課題(年度末・3月提出)
生徒指導	<p>〈積極的な生徒指導の推進〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒指導の4つの視点をあらゆる教育活動に取り入れる。 生徒の情報や気になることの報告・連絡・相談を欠かさない。 教師一人一人が毅然とした態度で指導し、学年集団や教師集団などの組織やチームとして指導にあたる。 強い1回の指導ではなく、信頼関係の構築を大切にし、生徒の気づきを促すような日々の指導を心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒同士が自己決定する機会として、委員会活動の充実等を図っている。日々の活動や生徒議会の内容も、学校をより良くするにはどうか、という視点での話題に変わってきている。 生徒指導部会では生徒情報を共有できている。生徒理解の会を通して、情報連携から行動連携への意識が高まっている。即効性をもって解決できる問題ばかりではないが、学校全体として生徒を意識して見ていく姿勢は高まっていると感じる。 生徒指導が必要な場面では、学年教員が中心となってチームで指導に当たっている。 禁止言葉による指導ではなく、より良い行動を促せるような声掛けが意識されてきている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒議会の運営等、生徒が主体的に動ける場面が増えてきた。生徒会の生徒からエンカウンター提案が出てくるなど、学校をより良くしたいという意欲が高まってきていると感じる。 生徒指導部会、生徒理解の会を通して、生徒の情報を共有し、対応策を考えることができています。 指導が必要な場面では、チームで当たることができている。教員が個人で対応している場面はほとんどなかった。管理職を中心に、情報共有も迅速に行えている。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 服装面等の細かい声掛けをそろえることができなかった。細かい情報共有を行い、早期対応が必要である。 授業や休み時間の過ごし方に課題が見られる。教職員からの呼びかけ方をそろえていく必要がある。
道徳教育	<p>〈自主・自律の精神、互いの考えを尊重し、思いやる心を育む〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 丸中基本スタイルの共通実践を徹底する。 自己を振り返り、向き合うことを通して、自らを律する精神を高める。(道徳ノートの活用) 「伝え合う」ために、話し合い活動の際は「聴く」「考える」「話す」の3点を大切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任が中心となって、丸中基本スタイルの共通実践を徹底することができた。 道徳ノートやワークシートを活用し、生徒が自分の気持ちを書いたり、振り返ったりすることができた。 「聴く」「考える」は定着してきたが、生徒同士が活発に議論することや深く考え「話す」こと場面は少ない。2学期以降も「話す」場面を増やす工夫をしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任中心に授業を行ったことで、各クラスの道徳のスタイルが定着していた。 若プロで道徳に関する研修を行い、教員の道徳の授業に対する意識を高めることができた。 学年が上がるにつれて、自分から進んで挙手する生徒の数が少ない。生徒の考えが引き出すのが難しいので、ICTを活用し生徒が考えを引き出せるような工夫が必要である。 話し合いの場面で私語をする生徒がいて、話し合いが深まっていないようも見られるので、落ち着いて話し合いができる雰囲気づくりを大切にする。
G I G A	<p>〈教員のICT活用スキルの向上と校務DXの推進〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 活用を苦手とする教員に個別に操作等について相談会を開催し、アドバイスする機会を増やす。 オンライン授業が実施できる環境づくりに努める。(Microsoft Teamsの活用) Qubenaを全学年で効果的に活用し、基礎学力の定着をはかる。 百問繚乱による採点を2学期より完全実施を行う。 校務DX先導推進校として、教育研究センターと連携して推進に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> どの教員もICT端末を積極的に取り入れた主体的で、対話的な授業の推進に励んでくれた。その結果、生徒も現状のタブレット端末の操作については問題なく、作業や取り組みができています。 課題としては、生徒がICT端末を堪能に使えるがために、タブレットのマナーやルールがまもられていない事例が見られる。 Qubenaについて、持ち帰り学習として配信しているものの、配信することしかできておらず、PDCAサイクルもできていないため、これから工夫がひつようである。 テスト採点のために百問繚乱を導入したことにより、特に5教科の先生の業務負担が軽減されている様子が見られている。ただ百問繚乱に合わせた問題の傾向になるのは、これから避けていきたい。 逐次、ICT機器の端末の操作に対する質問は個別対応を行っている。今後、新しい端末に変わることも含めて、相談会の実施を計画的に行っていきたい。 オンライン授業の実施を想定し、1学期修了式をオンラインで開催した。 Qubenaの利用率は、想定よりも低い結果となった。学年を通してタブレット端末の持ち帰りの実践に差があることが理由の一つとして挙げられるため、2学期以降に共通の実践として活用を行ってきたい。 1学期期末テストから実践を行ってくれる先生が多かった。2学期への完全実施に向けて利用の推進を行ってきたい。 校務DX先導推進校として、健康観察のデジタル化や図書室の本の予約のデジタル化を行うことができた。更なる実践を行うために教育研究センターと連携とりつつ推進に取り組んでいきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習用端末の変更にも教員・生徒が柔軟に対応してきている。しかしWindows端末との動作の違いにより、対応しきれていない部分もある。今後は、GIGA研修も重ねながら、経験を積んでいく必要がある。 生徒のインターネットのリテラシーが甘く、学級・学校全体のルールやマナーが守られていない事例がある。これについては、担当教員のリテラシーを高め、指導を徹底していく必要がある。 どの教科においても、「百問繚乱」を活用しているため、テスト採点の時間が大幅に削減している様子である。今後も積極的に活用していきたい。 校務DX先導推進校として、健康観察のデジタル化や図書室の本の予約のデジタル化を行うことができた。更なる実践を行うために教育研究センターと連携とりつつ推進に取り組んでいきたい。
人材育成	<p>〈若手教員の教師力向上〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部講師を招聘し、現代的諸課題についての学び、実践力の向上を図る。 ミドルリーダーがメンター的な役割を發揮することで、若手の学ぶ機会を増やす。 校内研修や各種部会も研修の機会と捉え、若手教員が納得感をもって校務を推進するような体制を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育についての校内研修を夏季休業中に行い、個別的教育支援計画と個別の指導計画の作成と活用について確認する。 夏季休業中に、特別活動についての校内研修を行い、ミドルリーダーが若手の話を聞く機会を設ける。 校務や保護者対応について先輩教員から話を聞く機会を設ける。 	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部講師を招聘して特別支援教育について学び、個別的教育支援計画の再整備を行うことができた。 先輩教員から学級経営についての話を聞き、担任としての心持ちや、信念について考えを形成する機会を設けることができた。 生徒指導の研修において、発達支持的生徒指導を意図的に学校全体で行う重要性を学ぶ機会を設けることができた。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部講師を招聘したり、先輩教員の話聞く機会を設けたりと必要と思われる研修を計画的に行ってきたが、今後は若プロの中でのニーズを生かした研修を行えると良い。
保健指導	<p>〈健康な心身づくりの推進〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 栄養教諭、養護教諭、教科担当などと連携し、計画的・意図的な保健指導や栄養指導を行うとともに、早寝早起き朝ご飯を定着させ、活力ある生活態度を養う。 食育や健康リテラシー教育を通して健康な体と心を育む。 生徒の不安や悩みを迅速に把握し、解消できるように面談週間やアンケートなど生徒理解に努め、相談体制を充実させ、いじめを許さない学校風土を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 給食時間に各教室を回り、気になる生徒や行動について担任や学年の職員に情報共有している。 本校生徒の課題を明確にするために、1学期末に朝食・睡眠調査を行った。結果は保護者懇談会の際に来校した保護者に見てもらえるように掲示物を作成し、教室前や、かけはしホールに掲示する。また、2学期以降は適正な朝食摂取や睡眠時間確保にむけて呼びかけや個別の指導に活用していく。 保健室の来室の生徒に関してこまめにデータ分析を行い、生徒指導の会(教育相談)の時間に職員に提示できるようにしている。面談週間で気になった生徒や、Qで気になった生徒の把握に努め、心のサインを逃さないよう務めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 日々の給食時間の見回りと情報共有により、各学年の職員と連携して見守りができ、配膳トラブルの未然防止につながった。また、献立食材に関心を高め、残食が減るように玄関に掲示物を設置しているが、今年度は特に牛乳の残食が多かった。次年度の課題である。朝食の摂取率は、おおむね良好であったが、内容を良くしていくことが今後の課題。 保健に関して、1学期末の調査の結果から課題を明確にし、その改善を目指した内容で学校保健委員会を開催することができた。また、調査結果等を保護者に見てもらえるよう掲示物を作成し、教室前やかけはしホールに掲示するとともに、お知らせも配布した。事後も生徒保健委員会を巻き込んで全校生徒への呼びかけができ、子供たちの意識も少しずつ上がっているように見える。 保健室来室データの分析を行い、教育相談の会に提示することで、不安や悩みのある生徒の見守りや対応を組織的に迅速に行うことができた。

学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> 学校評価の内容を知り、PTA活動だけでは見えなかった学校の頑張りが見えた。とても学校は頑張っていると感じる。もっと、この内容を広く伝えていった方が良いのではないか。 「多忙化」「業務改善」という言葉の中、教職員と保護者との関りが薄くなっているようにも感じるのが残念である。 若い教員が多く、ミドル層が少ない中でも教育のアンバランスが生まれていないのは素晴らしいことだ。 地域住民の視点から見ると、丸内中の生徒は比較的良い印象である。朝、挨拶をする生徒もいる。 教員はなかなか自校以外の授業を見る機会がないので、是非、県外視察などにも積極的に取り組んでほしい。 小中連携については、学力のみでなく、生徒指導や学習規律などの面でも交流が進んでいくと良い。 保健指導については、園児の段階ですでに好き嫌いが多かったり、睡眠時間が不足していたりする現状があるので、中学校でも是非推進してもらいたい。 部活動の地域展開が進んでいるが、先生方に中学生を教育する立場から、部活動にかかわる機会をもってもらいたいという思いもある。
---------	--